

《パネリスト 吉成正士》

はじめに

こんにちは。吉成です。座って話しさせてもらいます。あの写真の載った新聞記事ですが、ご覧になった方もこの中にもたくさんおられるのかなという気はするんですけど、あの記事が一昨年2021年3月14日にした授業だったと思うんです。高校受験が終わった後、どうしてもやっておきたいと企画してやった授業なんですけども、中学1、2年生400人くらいを前にして話をしてもらいました。

立場の学習と学習会に関わる意味

(一言一言、自分の中で確認しながら)なぜ、その企画をしたかということなんですけども、私が板野中学校に赴任したのが教員になって4年目。当時、同和教育主事であるとか、同和担当教員になったのが、教員になって8年目から7年間、同和教育主事、同和担当教員をしたんですけど、わかる人はイメージしていただいたら思い出せるかなと思うんですが、その仕事をしつつ、一方で、地区の子、被差別部落の子らに、立場の学習をするということだったと思うんです。

立場の学習をすると簡単に言いますが、見方を変えてみたら、すごく残酷なことをしているかもしれないわかったです。自分の立場を子どもたちに伝える。そのことについて学習をするということは。だけど、当時仕事として、もしくは、その時代の流れとして、地域の要望としてそういうことをしてきたと思うんです。

学習会も、あるいは、小・中学校の学習会に立つ教員は。では、その後、その子どもたちがどう育って行ったのかというところを、見ていくのが筋でしょう。教員が終わったからといって、その子らが卒業したからといって、それでおしまいというわけにはいかないと思います。それは、「当時の私の仕事がそれだったから、その後の責任は負いません」という人もいるかも知れませんが、人として、関わっていて、はい、さようならでは筋が通らない。そう思ってきました。それでは、自分に何ができるのかというところを考え続けるしかないんですね。そういう中で歩まれてきた地区出身の方。今たくさんおられると思います。

板野中学校を出て、応神中学校という徳島市内の中学校に変わって行っても、そのスタンスは変わりませんでした。それでずっと関わり続けてきていました。できることなら、多くの子どもたちと一緒に人権学習・同和问题学習をやり続けていきたいと思って、やり続けてきました。そこでやっぱり、あの頃の子らは今どうしているんだろうなということを思います。遠くで話を聞くこともあります。それは、幸せになっていてよと思います。思いますけど、幸せになっているケースも聞きますけど、残念なケースも幾例も聞きます。1つや2つではないんです。

恋愛を反対されている。結婚を反対されている。「先生、どうしましょうか。どうしたらいいですか」と相談に来る。「彼氏連れて来い」と言って彼氏と話をする。いい加減な気持なら今すぐ別れてくれと言って、別れた人もいます。「こんなのと一緒にならなくてよかったな」と言うしかないです。「それでも一緒にになりたいです」と言う人もおられます。一緒にになります。「ちゃんとお家の人に話をしてや」と言います。「お家の人にちゃんと了解得てよ」という話はしますけども、了解を得られた子もいれば、得られなかった子もいます。50年、60年前に夜逃げ同然で結婚したという話は聞きますが、このご時世でそれがあるかということなんです。あるんですね。でも、そのあるということを知らない世代が来たということです。

若い先生たちと共に教育に関わる中で

今、八万中学校という徳島市内の中学校に勤めて7年目になるんですけど、その7年間、ずっと私は特別

支援学級の担任をしていますけれども、うちのクラスの子たちが在籍しています交流学級の先生が居られますけど、7年間、もの見事に若い先生なんです。新任の先生とか2年目の先生など、とにかく20代の若い先生なんです。その人と一緒に人権学習とか道德の授業を見ていく、作っていくわけなんですけど、「この先生わかっているのかな」と思うことがよくあるんです。今年は、23歳大学出たての男の先生です。いけるかなと思いつながら一緒にやっていますけども、伸二さんが話をしに来てくれた時も、同じだと思ったんです。この若い先生らに何かを伝えていかないとと思うわけです。

部落問題の捉え方・扱い方の変化

(力を込めて)2004年に法が切れた。切れたからといってその時に部落差別がなくなったわけではないですね。その後もずっと続いているはずですね。立場学習は、あの年になくなったかもしれない。地域差はあると思うんですけど。けど、地区の子は、部落の子はいますよね。その子らはどうしているのという話です。

立場を知って大人になっているのか、知らずして今大人になっているのか。知らずに育って行って、大人になって誰かからあばかれたら、こんな悲惨な話はないじゃないですか。かといって、これは各個人の責任の問題だから、どうぞ各家庭でやってくださいと各家庭に任せられて、それが担える家庭がどれだけあるかということです。

僕らが同和教育主事の時もよく言われましたよ。部落のお父さんお母さんに言われました。「私ら、そんなのしゃべれんから、言うことないから、先生の方でやってください」「そんなことを言わないで。お父さんお母さんのしゃべれることはいっぱいあるはずですよ。いろんな体験をしてきたんだから、それを話してください」そういうやり取りをしながら話をしてもらったこともあるし、僕らが話したこともあるし。様々だと思うんです。

それが、今、各家庭、個人の責任にされていっているということです。法が切れて、どうしているんだろうということはずっと思い続けてきた20年間です。ずっと思い続けてきて、若い先生に「昔のことじゃない。法が切れたからといって、部落差別が解消されたわけでもない。それ以降も、その問題は続いてきている。それではどうするのということを考えて欲しい、2年前にあの企画をして来てもらった。当時、連絡のやり取りをしていた徳島新聞の記者がいたので、連絡したら、「取材に行かせてください」ということであの徳島新聞の記事になっていったわけですけども、あれから1年後。去年の中学生集会で話をしてみないかという打診をして、彼(伸二さん)が引き受けてくれたわけです。

(笑顔で)まあ、この後、直接本人から話を聞いてもらえたらと思いますけど、(精いっぱい思いを込めて、一言一言をかみしめるように)同じ思いをしている親御さんが、大勢いるということ、私たちがどう受け止めるかということ、自分ごとで我々は考える必要がある。教員が終わったから終わりじゃない。(言葉を探しながら)「部落に生まれたことは恥ずかしいことでも何でもない。胸を張って普通に生きていればいい。」よく言います。よく言われていたと思います。そうであってもおかしくないはずなんです。でも、それができていないのはなぜなのか。それはやはりいろいろな問題を残してきているからとしか考えようがないんです。それはやっぱり、さっきの動画にもありましたが、世代を超えて、大人も子どもも一緒になって考えていく。ものを言っていく。意見を交わしていく。そんな必要性があるんじゃないかなと思います。言えない状況を作っているのは、いったい誰なのか。

人権のリーダーの若者の力を合わせられる場づくり

(気持ちを切り替えるように)八万中学校に来て7年目を過ごしています。中学生集会も今年の分は終わり

ました。今年のパネリストもなかなか話をしてくれました。皆さんに聞かせたいくらいの話をしてくれました。人権こども塾の方も続いていっています。何とか、そういう人材を作っていきたい。当時で言えば学習会。それから、高校生友の会というのがありますけども、今は、一部地域にしかないくらいだと思います。

ということは、あの時、人権のリーダーとして会を担っていてくれた学習会の子たち、高校生友の会の子たちは、今はいないということです。それでは、今この時代の人権のリーダーの若者は、どこでどう作られて、どれだけいるのかということです。思い当たります？私の中では思い当たらないんです。

それぞれには、人権意識の高い中学生高校生はいると思うんですよ。ただ、それが結集していない。力を合わせられる場を何とかしたいという思いがあって、中学生集会を開き、人権こども塾をしていますけれど、なかなか難しい問題もたくさんあります。いろいろな方に手を借りながら続いていかなければ運営できないという、難しい点もありますけれど、(一言一言かみしめるように)だけど、諦めるわけにいかないんですね。立ち止まるわけにもいきませんし、このフロアーにも同じ思いの方もおられると思うんです。

当時の思いであるとか、今の思いであるとか、そういう方も大勢おられると思うんです。そういう声を集めるというか、思いを寄せ合って、よりよい明日をみんなで作っていったらなと思っています。(コーディネーターに向かって、笑顔で)私からは以上です。